

仲間の輪、きずなを！ 全高・全青

第47回全国高校生集会・第59回全国青年集會を
10月10日・11日、福岡県都久志會館でひらかれ、県
連から高校生13人、青年20人、事務局3人が参加した。



あいさつする組坂委員長

はじめに、主催者を代表して組坂繁之・中央執行委員長から「第47回全高および第59回全青が福岡でひらかれることを歓迎し、そして集會が成功裡に終わりますよう皆様のご協力をお願いする」とあいさつした。つぎに、地元歓迎あいさつとして、山崎建典・副知事

◇分科会

分科会・テーマ	対象
1 交流&トーク	高校生
2 就職差別について考えよう	高校生
3 高校生と解放運動(仮)	高校生
4 狭山再審闘争	高校生 青年
5 cafe しゃべり場 ~もつと知ろう	高校生 青年
6 みんなでまちづくり	青年

からあいさつされた。全体集會後の分科会紹介では、分科会ごとに工夫をこらしたプレゼンテーションがおこなわれ、最後に集會スローガン「ひろげよう仲間の輪」「深めよう仲間のきずなを！」が提案された。

た。全体集會終了後、高校生・青年が各会場に分かれた。全青・全高が共同でひらかれるようになってから今年で2年目となり、分科会も参加対象が「高校生」「青年」「高校生・青年」といった形態となった。

2日目の「就職差別についてかんがえよう」では高校生が参加対象で、就職試験を受けるときに面接などで

人権啓発シリーズ講座第2回

人権啓発シリーズ講座第2回を10月6日、プラザホープでひらき、行政や企業、各支部員ら72人が参加した。

和歌山人権研究所が主催する「人権啓発シリーズ講座」としてひらかれ、今年で12年目をむかえる。

ただ単にこの事業を求めていくのではなく、そこにある差別の実態をなくしていくための事業として行政闘争を展開していく必要がある。

(2)

また10月から「マイナンバー」制度が導入されて

主張 「同対審」答申50年を ふまえ対和歌山県交渉を 成功させよう！

の克服まで至っていないのが現状である、巨額の予算を投資しながら、低湿地帯や河川敷に存在するため、今でも雨が降りつづく浸水する実態や決壊の可能性がある地域も存在している。いま流行の「想定外」という言葉を聴くと心配でならない。そして私たちは、

いる。住民票をもつもの一人ひとりに12桁の番号が振り分けられ、この番号をもとに行政の各種手続きを簡素化するものとして「鳴り物入り」でスタートしている。果たしてそうだろうか。このマイナンバー(個人情報)の管理はどうなっているのだろうか。数年前にな

で不当な差別に気づけるように知識をつけるため高校生でグループをつくり、統一応募用紙を使って面接する側・される側を実践するなど、これから就職の際に重要な選考や面接などについてすすめられた。また、今年には「部落地名総鑑」発覚から40年であり、部落解放同盟が就職差別の撤廃を求めて「統一応募用紙」の

が、税理士や司法書士など8業士に認められている「職務上請求用紙」を不正に使用して、個人の戸籍や住民票を商いとして売買する、いわゆるプライム事件糾弾闘争を私たちは経験してきた。一連の捜査のなかで市役所の職員をはじめ、陸運局の職員、ハローワーク職員、各携帯会社の職員が逮捕されていた事件である。犯行におよんだグループが金銭を提示し各公共機関の職員に近づき個人情報取得していた。マイナンバーもそうである。管理する側が問題意識をもち合わせていないと、簡単に漏洩してしまふ。



快活な口調で参加者をひきこむ
大北委員長

狭山事件を 考えよう



採用を認めさせ、全国で使われるようになったことなどが伝えられた。また、青年対象「みんなでもちづくり」では、府県連の各支部での子ども会活動や狭山学習会など、青年部活動のとりくみについてグループ

ごとに意見交換をした。6つの分科会のほかにも特別分科会では、さまざまな人権問題について学んだ。参加者は、2日間にわたる分科会をおして交流を深めた。来年は鳥取県の開催となる。

狭山事件といえば、夜行バス(有鉄観光)を思い浮かべる。私が県連の専従になった頃(36年前)は、バス10台で朝食用の弁当を各自持参し、深夜、集合場所に集まり、狭山の映画やビデオの「水戸黄門」「釣りバカ日誌」を参加者でみながら、東京の集會に参加していた。1年に2回「5・23」と「10・31」の狭山の集會である。大方のバスはほぼ満席で補助席に足を伸ばして座るものやバスの一番後部にある窓ガラスとの間に寝ていた者もある。いま思えばその時ほど狭山を勉強したことはない。狭山の映画では次になにをしゃべるのかセリフを覚えていたほどだ。一度だけ東京にたどり着けなかったことがある。2月7日の特別抗告棄却の緊急集會で大雪のために愛知県でリタイアし、私を含め役員だけ電車に乗り換えて集會に参加したこともあった。私たちが若手(当時)の専従は、参加者の管理と行動の説明で各号車に一人は乗車していた。乗り物酔いになるから酒に酔ってきた参加者やいろんな格好、パジャマ、

ドテラを着て用意万端の参加者もいた。私が連れ合いに会ったのも、その狭山のバスである。お互い若いのかバスの前方の席に座って、狭山にかこつけて話し掛けたのがはじめてである。当時はそういう縁で結婚された参加者も多いのではないだろうか。現在は狭山の集會も規模が小さくなり、ほとんど新幹線を利用して、その頃は「狭山の集會にいつてきます」と一人の家をでて、バスの集合場所に着けば5人、バスに乗れば40人、和歌山県連のバスの集結地点で400人になり、東京の狭山の集會に参加すると1万人になっていた。それが狭山闘争であった。「一人が万人のために、万人が一人のために」というスローガンが良く分かる集會でした。今年で狭山事件が発生してから52年が経過しました。石川さん自身は仮出獄を果たしているが、いまだ「みえない手錠」でつながれたままである。今年こそ狭山の再審を実現させていかなければならないと思っています。(宮本修作)